「ゲシュレヒト」をどう読めばいいのか

――『哲学のナショナリズム』藤本一勇訳　合評会報告――

檜垣立哉

本稿は、2021 年 8 月 7 日に、ジャック・デリダ著、藤本一勇訳『哲学のナショナリズム　性、人種、ヒューマニティ』岩波書店を巡る Zoom 合評会（大阪大学人間科学研究科共生の人間学分野主催、脱構築研究会共催）の檜垣による発表の報告である。合評会の対象は Jacques Derrida, *Geschlecht III, Sexe, race, nation, humanité*, Seuil, 2018.を藤本が翻訳したものの合評ということで、下記の引用は藤本の日本語訳のページ数を示す（他の文献も邦訳で示した）。

デリダのゲシュレヒト論考については謎が多い。ゲシュレヒトという多義的なドイツ語（性・人種・血統・類・人類・国民……）を巡って繰り広げられるデリダの一連の論考は連作としてさまざまな書物に収められ、これまでⅢが欠落していた。具体的にはⅠとなる「性的差異・存在論的差異」（1983）とⅡ「ハイデガーの手」（1984）が『プシュケーⅡ』に所収され、Ⅳ「ハイデガーの耳」（1989）が『友愛のポリティクス』に所収されている。Ⅲは基本的にはⅡの延長ともいえ、EHESS における「哲学の国籍と哲学のナショナリズム」という題目の連続講義およびシカゴ・ロヨラ大学での講義から成りたっているとのことである。またデリダは『精神について』（1987）を刊行してもいる。一連のゲシュレヒトの連作と『精神について』は、著述時期もつながっており、主題としてもハイデガー、トラークルの詩、そして Leiblichkeit をあつかう点において明確に共通点がある。とりわけこの時期の連作が、「動物性」という最後期の主題につながる過渡期性をおびていることは注目されるべきであるとおもう。

そうした問いを軸に、檜垣は本発表において、三つのテーマをたてた（もうひとつ、とりわけこのゲシュレヒトⅢにおいて、トラークルの詩との関連で、「調性」「鳴り響き」が主題になっていることもテーマとしてとりあげたかったのだが――とりわけカントの書物のパロディでもある『最近の哲学における黙示録的語調について』（1983）とのかかわりも想定されるため――与えられた時間の関係で割愛せざるをえなかった。だがこうした鳴り響きや調性の問題は、デリダのいわばハイデガーの脱構築的な継承において、重要なテーマであるだろう。

以下、発表したテーマを順番に記していく。

第一に、ゲシュレヒトの連作という、80 年代の一時期に集中的におこなわれている議論が一冊の本にまとめられておらず、バラバラに刊行されたのは何故かということがある（『精神について』も同系列と考えるのであれば、なおさらである）。ゲシュレヒト論考はそれぞれ読解に困難なものであるが、まさにゲシュレヒトというドイツ語の多義性を巧妙に利用しながらも、議論にはある種の収斂がみられる。Ⅰの主題が「性的差異」であることも含め、そこでは生物的・身体論的なデリダもいうべきものが、エクリチュールに固執していたそれ以前の時期とは異なり、姿を現しは

じめていることにはとりわけ留意すべきではないか。性的差異を論じるⅠは、ハイデガーの思考における現存在(Dasein)の性のなさ(Geschlechtlosigkeit)としての中性性＝中立性と、とはいえ空間化的契機において不可欠になるその「分裂」とを論じるものであり、身体性を看過することはできない。Ⅱが「手」を、Ⅳが耳をあつかうことは、手が「書く器官」であり、耳が「聞く器官」であることにおいて、エクリチュールを焦点とするデリダとむすびつきながらも、どこか「身体的なデリダ」、さらにいえば身体を政治や国家と絡ませ（ハイデガーの手は、ヒトラーの手と関連させられる）論じる「生政治的な」デリダへの先駆がみてとれる。90 年代の『法の力』を中心とする正義論や、それを「人間の境界」を超えて「動物」に向けて論じだすデリダの思考の萌芽を、そこにかぎとることは可能ではないか。

それだけではない。デリダの「ゲルマニスト」ぶりは、もちろん初期の論考がフッサールのテクストの細部を執拗に対象にし、70 年代の『弔鐘』でさらにヘーゲルへ固執しているなどからも明瞭であるが、ゲシュレヒトの連作においては、そのあり方がとりわけ際だっているとおもわれる。ハイデガー、フィヒテ（『ドイツ国民に告ぐ』）、とりわけトラークルという、ドイツ的なものへの傾倒は、無論それを内部から突き崩すことを目指しながらも、顕著である。デリダがその活動の途上で、やはり明らかにゲルマニスト的なジャン＝リュック・ナンシーやフィリップ・ラクー＝ラバルトと交錯していくこともかさなるのかもしれないが、題名そのものをドイツ語で提示するこの連作は、デリダのゲルマン性への極限的な露呈ともおもえる。

とはいえ、では何故これをデリダは、「統合」させなかったのであろうか。繰り返すがゲシュレヒトの連作は、超越論性、記号論性、脱構築のパフォーマンスから、正義論、動物論へ向かう「通過点」に位置するともいえる。ゆえにそれは、70 年代のデリダそのままに、パフォーマティヴなテクストの分散がなされているだけのことかもしれない。だがそれにしてもゲシュレヒトのこのあり方（ことさらにⅢを欠損させてⅣを先に発表する姿勢も含めて）は検討されるべきではないか。

第二の発表のテーマは、ゲシュレヒトを論じるデリダが、単純にハイデガーやフィヒテの「性なき現存在」「ナショナルなもの」を批判し、「分散」の契機を描きだすだけでないという点にかかわる。これはゲシュレヒトの読解をきわめて困難なものとすると同時に、まさに問題を宙づりにするデリダの振る舞いがそのまま示されてもいる。ゲシュレヒト全体を通じて最大の問題は「一」と「二」（重大な哲学的問題だ）の謎であり、その両者を調和的に描かないデリダの姿勢である。

確かにデリダは、ゲシュレヒトⅠの「性的差異」において、ハイデガーの現存在のゲシュレヒト（性的差異）への無自覚に触れるが、とはいえ最後までハイデガーが描きだした「中立性」のゲシュレヒトにこだわり、最後において判然としがたい「一」への回帰に近いことをのべたてもする。

> 遠ざかり、内と外、ここととそこ、誕生と死、誕生と死の間、共―存在と言説、こうしたものに頼らないような「性的」言説もしくは「性現象に関する」言説はいったどのようなものになるだろう（『プシュケー　他なるものの発明Ⅱ』、38 頁）。

とすれば、分散と多数化へと連れ戻すことによって、二によって封印されていないような性

的差異（否定性なき差異、とはっきり言おう）を思考し始めることが可能なのではないか（同上）。

デリダはハイデガーを批判しつつも、同時にそこで「他なる性的差異への道」（同上）を求めてもいる。そして、こうした事情は、ゲシュレヒトⅢの論考において、Ⅱでも主題化されていたフィヒテ的なナショナリズムにそくして、より強固に提示されることになる。

フィヒテは他の民族に対して〈ドイツ的なものがあなたがたを治し、あなたがたを贖うために今から到来する〉などと言っているのではない。彼はドイツ人たちに語っているのであり、それはある意味ではいまだ到来していない……ドイツ国民に向けた演説の言説なのである（『哲学のナショナリズム』、162 頁）。

それはこの論考が、はじめから「場所」（Ort）の「考究」（Erörterung）にむすびつき、そこで「ドイツ的なるものの」「余所者性」が強調されることにもかかわる。探究は場所を定位することであるのだが、その場所は存在しないがゆえに探られるともいえる。

もちろんデリダは、以下のようにのべてもいる。

しかしながら、この歴史的な住まいの故郷である存在のこのような近さから、祖国を、≪ドイツ的なもの≫を消し去ってはならず、空虚な普遍主義、すなわちナショナリズムの対称的かつ否定的な逆転としてもコスモポリタニズム、啓蒙主義にしばしば結びつけられるコスモポリタニズムに屈してはならない。つまるところコスモポリタニズムもナショナリズムも、インターナショナリズムもナショナリズムも、同じヒューマニズム的な形而上学の対称的な二つのヴァージョン、根本的には違いの無いヴァージョンにすぎないとされる（同上、162-163 頁）。

とはいえ、これを〈一〉と〈二〉という主題に連関させるとき――とりわけそれは、トラークルが主題化される場面であるが――デリダの主張はかなり謎めいたものとなる。

……詩の多義性を結集させる唯一無二の一義性、詩の一義性のこの唯一無二性は、散種や還元不可能な多調性よりも……高次である。逆接的にも、散種は、科学や技術、そして最終的には形而上学……と同じ側に、つまり下側に位置づけられるのである（同上、127 頁）。

ゲシュレヒトは対象ではない……ゲシュレヒトにおいては〈一〉と〈二〉は対立しない……「一つのゲシュレヒト」の「一」が〈二〉の代わりの〈一〉ではないとしても「さらにそれは無差異性のことでも、色あせた画一性の同質性のことでもない……性的差異がない状態でもない（同上、198-199 頁）。

こうして語られる一にも二にも還元されない一つのゲシュレヒトとは一体何なのか。また、政治

的な問題としても、ナショナリズムとコスモポリタニズムの対置を超える戦略をデリダがとりたいことは常識的にみても充分に理解できるが、そこで提示されてくる「夢想」の「一」とされるものはいったいどう解釈すればよいのか。

現存在の中性性（ゆえに〈一〉であること）、ナショナリズムの〈一〉への収斂、場所性への固着の保守性を批判して、分散、分裂、散種をのべたてるだけであれば、ある意味でそれは容易に理解できるだろう。だがトラークルをもちいて「高次の一」を語ろうとする言明は、上述のような単純な批判ではないし、そうした姿勢をとることへの疑念の表明でもある。これは、デリダの議論としては検討すべき余地がおおきいだろう。それがとりわけゲシュレヒトのⅢで強調されている点はみのがせない。

第三のテーマは、一連のゲシュレヒト論考と『精神について』を総合的にとらえるときにほのみえてくるデリダの「生政治学」の可能性についてである。もちろんトラークルの読解においても、一貫してデリダもハイデガーも「生物学主義」を否定してはいる。しかしながら身体性（Leiblichkeit）へのこだわりが、この連作（および『精神について』でのハイデガーの『形而上学の根本諸概念』での生物性への言及）においてみいだせるかぎり、デリダの生政治学の可能性を探ることは充分に可能であるとおもわれる。とりわけ着目したいことは、ゲシュレヒトⅢにおいて「蒼き野獣」という主題が現れることにある。

> ここで言われている動物は、獣的なものや、それにともなう乱暴さや暴力的な野蛮さを一切含まない動物性をもっている。ハイデガー曰く、この動物はおそらく獣ではない（同上、81-82 頁）。

またニーチェとの連関で「猿の Greiforgane（掴む器官）」（同上、83 頁）という語り方をおこない、こうした動物についての論述を、デリダはさらに技術と記憶とむすびつけていく。以下、引用を列挙する。

> ここで問われているのは、記憶、技術、そして動物性の問いであり……（同上、219 頁）。

> ところでハイデガーは、二つのものを切り離そうと、しかも二回切り離そうと欲するだろう……一方には異質な二つの本質として〈技術〉と〈思考する記憶〉とでもいうべきものがあり、他方には、動物と人間、〈獣としての動物〉と〈人間的な動物〉がいる。〈獣としての動物〉は、記憶を、思考する記憶をもたず、〈人間的な動物〉は、思考する記憶の力といったものによって区別される（同上、221 頁）。

> 〔ハイデガーのトラークル論「詩の中の言語」『言葉への途上』のデリダによる引用〕この蒼き野獣とは誰のことか……蒼き野獣とは、おそらくその動物性が獣性のうちにあるのではなく、詩人が命じる〈見守りの記念〉のうちにあるような動物である（同上、222 頁）。

> ハイデガーは、この動物が思考するものであると決定をくだし、この思考する動物への突破口を理性的動物から切り開こうとするのである。とはいえその理性的動物とは、形而上学のなかではまだ確立されていないものであり……（同上）。

デリダはハイデガーを利用しながらも、ハイデガーが『存在と時間』で明確に否定する「理性的動物」という規定をとらえなおし、むしろ人間の動物性にこだわっていく。もちろん、獣は言葉がない（理性がない）ことをのべつつも「蒼き野獣」がある種の「見守り」をなすことを主張する。この点からみても、ゲシュレヒトⅢでより明確化されるのは、「高次の一」という、〈一〉と〈二〉の対立に解消されない、人間の動物性や獣性の問いといえるのではないか。さらにそれはゲシュレヒトⅠの性的差異・存在論的差異の議論とそのまま絡みあいはしないか。

80 年代の同時期に、フーコーが「生権力」や「生政治学」を論じはめていたことと、デリダが「動物」的なものに着目しつつナショナリズムや民族性を考えていたことは、やはり留意すべきだろう。もちろん、フーコーの生政治学が、ナショナリズムやレイシズムの成立の記述をおこないながらも（『性の歴史Ⅰ　知への意志』）国家という問題系に踏みこまないことと、ナショナリズムを表面化するデリダとのあいだにははっきりした相違がある。デリダには、フーコーののべる「ミクロ・ポリティック」的な政治性へのかかわりは薄く、それは、正義論においてまさにそうであるように、いささか大上段に構えた議論であるといえる。とはいえ、ある時代のなかで、生命／動物／政治が焦点化された事情について、より踏みこんで考えられるべきではないか。

『哲学のナショナリズム』が刊行されたことにより、われわれには、80 年代におけるデリダ自身の思考の過渡期の問題性、Leiblichkeit の主題による、たんなる〈二〉の分散を求めるだけではなく高次の〈一〉という不思議な主題を展開するデリダ、そし人間の動物性という点で、フーコーと同時代に、しかしフーコーとは異なった仕方で生政治学的な議論に接近するその姿勢がより鮮明になったとおもわれる。

上記を巡る Zoom では上述のテーマについて、さまざまな広がりにおいて討議がなされた。今後は自分の問題として、一連のテーマへの考察をさらに深めていきたい。

引用文献

ジャック・デリダ著　藤本一勇訳『哲学のナショナリズム　性、人種、ヒューマニズム』岩波書店、2021 年

ジャック・デリダ著　藤本一勇訳『プシュケー　他なるものの発明Ⅱ』岩波書店、2019 年